

神の母聖マリア

2011.1.1

民数記 6・22-27

ルカ 2・16-21

新年 明けましておめでとうございます。

2011年の元旦、こうして私たちの心の実家である、高円寺教会の聖堂に集い、共に祈りをささげることが出来ることに感謝したいと思います。この年の初めに私たちがささげる祈りの全てを、神の母である聖母がその御心のうちに納めてくださり、この祈りをささげる私たち一人一人ひとりにその慈しみの御目をとめてくださって、私たち一人ひとりの願いを、その御心の中で思い巡らして下さるよう祈りたいと思います。

毎年この年の初めの1月1日は、神の母聖マリアの祭日であり、世界平和の日と定められています。私たちを取り巻く世界の現状にあって、この地上に生きる私たちが神の母である聖母に願い求めるべき最も根源的な願いは、世界の平和であり、そこに生きる全ての人にとっての平和です。そして、私たちが平和を求めるなら、その願いを託するのに最もふさわしい方は、神の母であり、私たちの母である聖母マリアです。

クリスマスを祝った降誕節の喜びの中で、私たちは新年を迎えています。降誕節の聖母は、御子イエスをその胸に抱かれた聖母です。そのお姿こそ、私たちがこの地上で味わうことが出来た平和のありかを示しています。幼子を抱く母親と、その胸に抱かれて無心に眠る幼子の姿こそ、私たちが立ち戻るべき平和のシンボルであり、何にもまして守り抜くべき平和そのものです。むき出しの国家権力の衝突としての悲惨な戦争の中で、戦場に駆り出されて行った多くの兵士たちは、後に残した母と子を守るために、無残にもそのいのちを戦場に散らしていったのです。どんなにか生きて、その母と子のもとに戻りたかったことでしょう。全身で抱きしめることが出来る平和そのもののもとに戻りたかったことでしょう。その母と子の無事のみを願って、彼らは自分のいのちを犠牲にしたのです。このようなことが世界中のどこであっても、二度と繰り返されてはならないのです。幼子イエスを胸に抱く母マリアは、人間の愚かさが生み出す、今もなお世界の各地で絶えることない戦争の犠牲となった母と子の悲痛な叫びを、決して奪われてはならない至福の平和の姿をもって、わたしたちに訴えています。

この正月、日本各地の神社やお寺は初詣の人々で賑わっています。テレビに映し出される、そのような華やいだ正月の風景の中に、今私たちの国が享受している平和の姿が示されているように思えます。ますます厳しさを増してゆく社会

情勢の中にあつて、この一年の無事と安全を願う人々の心は、人間本来の姿を取り戻しているように思えます。熾烈な競争社会に身を置く日々の中にあつて、自分たちが求める幸せが、他の人々を利用し、踏み付けにしなければ手に入らない現実を生きながらも、初詣で祈る人々は、決してそのようにして手に入れる幸せを祈っているわけではありません。神仏のご加護によって与えられる幸せを祈っているのです。たとえ、それが他の多くの人々の犠牲の上に立って手に入れることが出来る幸せであっても、決して、直接にそのことを願って、他の人を出し抜いて、幸せになることを願っているわけではありません。その証拠に、自分たちの幸せを願って初詣に向かう人々の列には、あれほどの混雑の中にあつても、他の人々を押しのける荒々しい殺気のようなものは感じられません。自分たちの幸せを願って、真剣に手を合わせる人々の心には、自分が求める幸せを他の人の幸せと比べて、幸不幸の度合いを測る邪念は感じられません。一心に自分たちの幸せだけを願って、手を合わせることによって、あれほどの押し合いへし合いの雑踏の中で、新年の平和の雰囲気醸し出されているのです。それだけでも、初詣に訪れる全ての人は等しく善男善女になれているのです。

経済と政治の力だけに支配されている世俗化された私たちの社会の中にあつて、毎年繰り広げられるこのような新年の光景は、私たちの国に古くから伝えられている精神文化の大切さを改めて考えさせます。私たちの世界が平和であるためには、私たちが願う幸せを、人間である私たちの営みを越えた者に願い求めるべきなのです。私たちの幸せを、人間に過ぎない者たちの計算に基づく経済や政治の力に委ねきってしまったてはならないのです。頭をたれ手を合わせて祈ることを忘れた幸せの追求は、一部の人々の幸せを実現できるかも知れないけれども、その一部の人々の幸せのための、多くの人々の不幸を生み出す結果になることを、私たちは知っているはずです。それが現実だとうそぶいて、私たちは、自分が求める幸せのために、人間としての心を置き去りにして、多くの人々の不幸を生み出し、それを固定化しようとしてきたのではないのでしょうか。その結果が生み出した社会全体のひずみの中で、私たちの耳を覆い、目を背けたくなる、人間として生きることが出来なくなるまでに追い詰められた人々の悲惨な現実が、一見平和に見える私たちの国においても、いたるところに噴出しています。あえて私たちの目を地球上に住む全ての人々の現実に向ける勇気を持つことが出来るなら、その現実の悲惨に苦しむ人々の数の多さと、そのむごたらしさに圧倒されて、私たちの善意の心はたちどころに萎えてしまいます。そのような人々の現実を前にして、私たちの目を背け、耳を覆わなければ私たちは自分たちの幸せを祈ることができなくなっています。しかし、そのよう私たちの祈りは、はたして神に届くのでしょうか。このような私たちの世界を覆う絶望的な状況の中で、私たちは神を見失ってしまう危機に直面しているのです。このような世界に

あつて、なお人間は神を信じる事が出来るのかという、悪魔の誘惑に曝されているのです。

今日の第一朗読の民数記は神が旧約の祭司たちに託された祝福のことばを伝えています。「主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように。」

人間である私たちが顔を背けたくなるような人間社会の悲惨に果たして神はそのみ顔を向けてくださるのでしょうか。この間に肯定の答えを与える神からの確証を、私たちはこのクリスマスにいただいたのです。わたしたち人間が作り出す社会がいかに人間の悲惨に覆われていようとも、神はその御子とその世界に生み出すことによって、この人間社会の一員となられたその御子のゆえに、この私たちの世界から、そのみ顔を背けることはなさない。これがキリスト者として私たちが、負いがたい苦しみを背負いつつも幸せを願って生きる、この世界の全ての人々の前で証すべき私たちの信仰です。そのためにも、2011年の新年にあたって、この涙の谷である世界に住む私たちは、平和の君である御子イエスを胸に抱く神の母に目をあげ、嘆きながら、泣きながらもひたすらに、御子がもたらされる、全ての人々の願いが満たされることによって、初めてこの世界に実現する平和を願い求めたいと思います。自分の目に、自分の心に涙をためながらもその涙を振り払って、神の母、聖マリアの御心に結ばれて、言い尽くせない苦しみのうちにある全ての人々のために、神の祝福を祈りたいと思います。主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように。この祈りが、私たちの新年に当たっての今日のミサの祈りとなりますように。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高